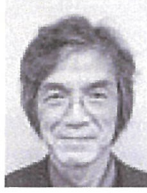


4 日本神話と世界の神話 —構造分析による比較

【全4回】／開催方法：現地

でぐち あきら
出口 顯

島根大学名誉教授
中村元記念館東洋思想
文化研究所研究員



受講料 会員料金：¥7,400 早割価格：¥6,400(納入期限：2024年1月30日)

【日程】【全4回】 4回／月 毎週火曜日
(2024/2/6、2/13、2/20、2/27)

【時間】10:30～12:00

■受講に必要なもの

[テキスト] レジュメ配布

1. まず、古事記のスサノヲに殺害されたオホゲツヒメの体から穀物が発生するという日本神話を読む。このエピソードと類似した内容の神話が、ハイヌヴェレ型神話として特にメラネシアで語られていたことを、日本の神話学者吉田敦彦の研究により紹介し、日本神話は他に類を見ないユニークな神話ではないことを講義する。
2. ついで吉田敦彦に大きな影響を与えたフランスの神話学者ジョルジュ・デュメジルのインド=ヨーロッパ語族の3機能体系の考え方を紹介する。デュメジルによればインド・ヨーロッパ語族の神々の体系は、主権=司祭的神、戦闘神、農耕神の3層に分かれ、序列化されている。それは神話を語る社会の構造とも対応する。では日本神話にも類似した特徴が見られるかを吉田敦彦や大林太良の研究を通じて考える。
3. 現代の神話研究に大きな功績を残したフランスの人類学者クロード・レヴィ=ストロースの構造分析の特徴を彼の名著『神話論理』によりながら講義する。レヴィ=ストロースによれば、神話には二項対立・媒介・変形という特徴があり、それらにより、制度や事物の始まりにいかにも適正な距離が設定されたかが物語られるという。このような理論の紹介を踏まえて、レヴィ=ストロース自身による「因幡の白兔」と北米先住民神話の比較を紹介し、古代日本と北アメリカ先住民の神話的思考の類似性を考える。